

母国

主任司祭 晴佐久昌英

「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」（ヨブ記1・21）

ヨブ記の中でも特に有名な一節です。身も心もすべては主から与えられたものなのだから、最期はすべてを主にお委ねするのだという信仰が良く表れている個所ですが、興味深いのは、ヨブが「そこに帰ろう」と言っていることです。

「帰ろう」と言うからには、もとはそこにいたわけです。もちろん地上の母の胎に戻ることは不可能ですから、ヨブは天をこそ究極の「母の胎」としてイメージしています。彼は、自分は天から生まれて来たのだ、そして天に帰るのだという真理を知っています。

カトリック教会では、信者が亡くなった時「帰天」という言葉を用います。子どもの頃から使っていたので普通の日本語だと思っていたら、あるときカトリック独自の言葉だと知ってびっくりしたのですが、人間の本質を表す美しい表現だと思うので、ぜひ多くの人になじんでいただきたい。わたしたちは去っていくのでも消えてなくなるのでもなく、本来の場所に帰っていくのだという信仰、わたしたちには帰るべき天のふるさとがあるのだという希望は、だれにとっても支えと慰めになるのではないのでしょうか。

海外で戦争や紛争が勃発したために、たまたま現地を旅行していたり、駐在している日本人が危険にさらされることがあります。そんなとき、邦人保護の名目で自衛隊機を送って彼らを連れ帰るのは、日本政府の責任です。先日のスーダン内戦のときも数十人の日本人が保護されて帰国しましたが、非常に危険なオペレーションだったために一同は相当緊張したようです。全員無事に帰国して安堵しましたが、インタビューを受けた一人の言葉が印象的でした。「飛行機から富士山が見えたとき、思わず涙が出そうになった」。

空爆があり、狙撃があり、いつどこで命を失うか分からない中を数百キロメートル車で移動して隣国の空港までたどり着き、なんとか自衛隊機に乗り込んだ人が、なぜ富士山を見て涙をこぼしそうになったのでしょうか。言うまでもなく、富士山が「母国」のシンボルだからです。生まれ育った「母なる国」に帰り着いたと実感したからです。

とはいえ、その国が最終到達点ではないこともまた、真実です。やがて人は死を迎え、その国からも去っていくのですから。聖書が教えるとおりに、私たちはこの世ではあくまでも「旅人であり、仮住まいの身」（1ペトロ2・11）なのであり、「わたしたちの本国は天にあります。」（フィリピ3・20）

仮住まいの間は、まだまだ戦争があり、天災があり、疫病があり、家族や仕事の悩みがありと、なかなか過酷な旅を続けなければなりません。しかし、どんな旅にも真に安らげる最終到達点があります。それを知らずに、どうして歩き続けることができるのでしょうか。

いつの日か、まことの母国である天に帰る時が来ます。その日、わたしたちが目にするのはどんな景色なのでしょう。ああ、ほら、すでに帰り着いた大勢の人たちが迎えに出て、笑顔で手を振っているのが見えます。愛した人、お世話になった人、もう一度会いたかったあの人、この人。その真ん中におられる、あれはもしかして、イエスさまではないですか。まさしく天の母国のシンボルであるお方を目にして思わず、安心の涙があふれ出ます。そのときわたしたちは、ようやく思い出すのです。「ああ、ここだ、ここだった！」と。

